




そして、旅は唄となった 
～始まりのうた～

迷音寺イダテ

プロローグでございやす～

晴れ渡る空。雲一つないそのキャンバスは決して耐えることのないすべてを手にしていた。何時どうなるかもわからない人生を背負った人間を相手にすらしようとしない。お前は目的を持って生きているのか。

そんなことでは、お前も何時しか死ぬぞ。何もせず、ただいるだけ。それはおかしい。お前にだって少しは感じるものがあるだろうに。だったら、お前の感じるものすべてを俺に教えてくれ。この憎たらしい地を見てどう思うのか……。目的は何だ。

「おっと……っと」

貧血は油断すると、大事になる可能性、大。足がもつれて1, 2歩後退。と、思いきや、そのまま倒れ……。

(ボタンキュー！？)の予感……

だが、その時だった。背中を何かが支えている。

人の手であった。

「大丈夫か？総司……」

支える手の主の声。その音にハッと、すぐさま体勢を整える。振り返れば見覚えのある面。

そう、この人物は……。

土方歳三。

「ハ、ハイ！大丈夫です！！」

後頭部に手をあてて、スリスリ……

「全く……こんなところでケツをつくな……」

「す……すみません……」

苦笑で謝罪。

(それにしても、ケツつくなって………何で素直に尻餅っついていかないのお??)

まあ、それはともかく。

あなたはこれから起こることが真実なのだと受け入れることが出来る？

それでは、いってみましょう！新撰組の愛と勇気の傑作を！！

って、あれ？